



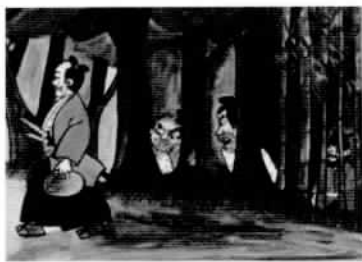
人が集まり、先生のお話を熱心に聞きました。

村人「先生、良いお話をしてもらい、みんなが喜んでいま

した。ありがとうございます。

「おや、きれいなお月様が出ていますな。でも、夜道は気をつけて帰ってくださいね。このごろ、わるい追いはぎがちよいちよい出るといいうわさを聞いていますよ。」

先生「ああ、私も聞いたことがあります。村の方たちと、色々話をしていたら、遅くなつてしまいました。月夜で明るいから助かるよ。さあ、急いで帰るとしましう。」



②先生は、竹やぶの暗い道をしばらく歩いていきました。

—声をひそめて言つ—

すると、物陰からなやから動くような気配がしました。それに続いて、カサカサ、ザザ



ザツと、音がしました。藤樹先生は思わず、

先生「おや、キツネカタヌキでもいるのかな。」と言いました。

③とつぜん三人の男たちが、飛び出してきました。藤樹先生の行く手をふさぎました。刀を抜いた頭らしい男が、大声で言いました。追いはぎ頭「ちよつと、待ってもらおうか。」

先生「何の用だ。荒つばいではないか。」

—さつと、ぬく—
④追いはぎ「おれたちは、腹がへつている。金をくれ！」
先生「そうか。金なら、少しは持っている。やつてもいいぞ。」

—声をひそめて—



追いはぎ2「おかしら、さむらいのよう

ですぞ。」
追いはぎ頭「しかし、見たところ、強くはなさそうだ。」

—大きな声で—
追いはぎ頭「今日は、酒でも飲みたい気分だ。金を全部おいて行け。」
先生「困ったことを言うな。これだけしか持つておらぬが、二百文ほどはある。腹がへつているなら飯代ぐらいにはなるだろう。」

追いはぎ1「えつ、たつたそれだけか。」
先生「腹はじゅうぶんふくれるぞ。『酒飲みたい』などと、ぜいたくは言うな。」

追いはぎたちは、刀を抜いて、藤樹先生を取り囲みました。
⑤追いはぎ1「おかしら。この男、刀を二本もさしていますよ。」
追いはぎ頭「よし、命が惜しければ、刀も着物も全部おいてさつさと行け。」

藤樹先生は、目を閉じて腕組みをし、考える様子を見せました。
先生「どうして、私がお前たちにそこまでしてやらなくてはいけないのか、考えてみよう。……」

追いはぎ2「おいおい、いつまで待たせる気じゃ。」



早くしろ。」

藤樹先生は、しばらく考えて、かつと目を開き、大声で言いました。
先生「断る！」

お前たちに何もかもやる理由が見つからぬ。」
追いはぎたちは、いつせいに刀をぬき、今にも飛びかかりそうな身構えをしました。追いはぎの頭は言いました。
追いはぎ頭「そうか、命が惜しくないと見える。それならば……」

—さつと、ぬく—



⑥先生「よし！相手をいたそう。刀を構えたところを見ると、お前たちは、さむらいだな。……ならば、

戦う前に名を名乗るのが決まりだ。私は、近くの小川村にすむ中江与右衛門である。さあ、お前たちも名乗れ！」

追いはぎ頭「えーつ、小川村の中江与右衛門と言え、あの有名な中江藤樹先生ですか。」

先生「そうだ。私の名前を知っているのか。」

男たちは、腰を抜かすほど驚きました。

追いはぎ頭「まさか、ここで近江聖人と言われている藤樹先生に出会うとは思わなんだ。どうしよう。」
⑦男たちは、刀を納めて、地面に